

主題	入居者とともに楽しむ『くらし』の実現に向けて		
副題	音楽アクティビティをきっかけにした『よろこび』の発見		
レクリエーション・アクティビティ		やりがい	
研究期間	14カ月	事業所	特別養護老人ホーム 神明園
発表者：石原 健太（いしはら けんた）		アドバイザー：有田 昌代（ありた まさよ）	
共同研究者：岩田恵利香・國安美沙・清野大地・細野悠・松堂千秋・渡辺早紀・滝沢昭子・中村正人			

電話	042-579-2711	メール	kenta@sinmeien.or.jp
FAX	042-579-6868	URL	http://www.sinmeien.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京の西部に位置する羽村市、(人口約5万7千人)に、市内3番目の特養として平成11年に開設し、今年で13年が経過しました。『楽しみ』『くらし』～そして『よろこび』を理念に掲げ、全員参加による生活援助の実践を目指しています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

開園から13年が経過し、入居期間の長期化がもたらす状態変化、新規入居の重度者増、さらには職員の入れ替わりなどから、生活支援の介護実務がルーチン化し、入居者個々のニーズに即したアクティビティに必要性を感じつつも、三大介護を中心とした状態に陥りつつあった。

そこで、2011年6月より、職員が楽しんで継続的に取り組める、かつ入居者が理想としては自主的に楽しめるアクティビティを模索し、予てより導入を考えていた音楽を使ったアクティビティに取り組むことを決め、高齢者との音楽活動経験豊富な音楽療法士（以下、MT）をアドバイザーに迎え“音楽サロン”（以下サロン）を開始した。そして、7カ月が経過した頃、MTの介入により入居者が楽しんでいる様子が、職員のモチベーションを向上することにつながり始めた。そこで、入居者と職員がともに継続的に楽しめるメニューとしてセッションの発表を設定し実践した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目的】

○入居者が日々の生活の中に楽しみを見だし、職員、入居者双方が継続的に楽しめるアクティビティを構築する。

【期待する成果】

- 入居者
- ・音楽をツールとして、感情表出を集団力動とし回想につなげる。
 - ・人の前で歌う、演奏するという行為を成功体験につなげ自信を獲得する。
- 職員
- ・三大介護以外の生活の質的支援への応用拡大。
 - ・アクティビティの重要性の認識、積極性、企画力、演出力のスキル向上。

※この研究の一部は「第13回認知症ケア学会大会」にて発表しております。

《3. 具体的な取り組みの内容》

○取り組みのポイント

『一過性のイベント的なものではなく継続性のあるアクティビティ』

○対象者：入居されている全 120 名。

○開催頻度と実施時間：毎月 2 回隔週に居住 3 フロアで各フロア約 1 時間程度実施。前後には職員と MT でミーティング。

○サロンの内容：MT1 名、担当職員 2 名（プログラム作成、司会など）を基本とし、その場で関われる職員は随時参加。介護職員を中心とし、サロン実施案内（園内放送にて）や入居者誘導等、他部署と連携する。伴奏、歌唱に合わせた体操、口腔体操、歌唱、楽器演奏など。

○使用する道具：電子ピアノ（伴奏用）、入居者は職員とつくったサロンオリジナルの竹製打楽器を使用。

園のバックアップ体制として、MT との非常勤契約を締結し、長期的にわたり職員への技術教授を行える体制のフォローがある。

《4. 取り組みの結果と考察》

サロンの実践によって、楽しみを共有する日常的なアクティビティの充実が図れてきた。サロンでは ADL や認知症症状などで活動の障害になるケースは少なく、能動的に参加できる方たちにとっては積極的に声をだし、体を動かすまさにアクティビティとして、受動的な参加しかできない方でも、聴く、感じる、という感覚が集団力動として作用していることの実感が高まっている。

職員への成果としては、それまでフロアに音楽を流すことは、単にその時の職員の趣味嗜好であったりしていたものが、時間や場所、雰囲気、イベントなどの TPO を考慮した選曲を意識するようになってきた。

こういった背景もあり、平成 24 年正月にはブチセッションを実施し、本抄録作成時点では未遂であるが 7 月 22 日の納涼祭において、入居者と職員のユニットが実現している。

《5. まとめ、結論》

結果より、サロンの実践から得た成果は入居者と職員双方の積極性の向上につながり、サロン以外の時間でも、職員の「これをしよう！」というような呼びかけに対し、一部の入居者には積極的な反応が認められる。万能的な成果を出せているわけではないが、着実に当初の目的に近づく状況が認められているので、今後も継続して実践してゆきたいと考えている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、発表中に紹介する事例は該当の本人及び代理人に、本研究発表以外では使用しないこと、また、それにより不利益を被ることはないことを口頭にて説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 1) 綿 裕二編著、高齢者の寄りそい介護…考え方・進め方、黎明書房、2009
- 2) 高橋典子、高齢者と音楽コミュニケーション…レク・生活の場面編、黎明書房、2008
- 3) 甲谷 至、歌うことが口腔ケアになる、あおぞら音楽社、2008
- 4) 平野浩彦、口腔ケアのアクティビティ、ひかりのくに、2006
- 5) 柴田博・長田久雄編著、老いのところを知るぎょうせい、2003

《8. 提案と発信》

こういったアクティビティは継続してこそ、効果が最大限発揮されるはずである。しかし、現状での介護報酬体系では、今回の MT のような専門職の導入に対する加算が設定されておらず、専門職の導入が施設経営の圧迫を危惧するものとなっている。より効果的なアクティビティの実践には介護報酬体系の見直しが必要ではないか。

【メモ欄】